東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2006年2月10日

ファースク

ムスリムの皆様。今日のフトバでは、クルアーンで使われている「ファースク」という言葉について注目したいと思います。ファスクという語は、その語根からもアラビア語の単語ですが、無明時代の詩や文学では使われていなかった言葉でした。だからその概念はクルアーンのものであり、言い換えるならクルアーンは、この言葉を、それ自体に特有の概念を与えることによって、一つの鍵として用いているのです。

ファースクという言葉は，辞書で見ると、水気や湿り気が殻の部分に移ること、殻の外側に出てくること、つまり、本来あるべき状態からそれ、だめになる、ということを意味します。ムスリムが、大小の罪を犯し、その罪に固執することを表現する語でもあります。しかし、クルアーンを詳しく見ていくと、ファースクという語が不信心者、偽信者、そしてムスリムに対する一つの状態を示すものであることがわかります。したがって、ファースクは、ムスリムが罪を犯し、かつその罪に固執する、というだけでなく、もっと広い意味を持つことが推測されるのです。

私たちの結論として、ファースクという語はクルアーンにおいて、宗教と、宗教に関する事柄を真剣に受け止めず、それらに対して無関心でいる人たち、という意味で使われています。例えば、信仰することを、承認すべき大切なことだと見なさない不信心者は、ファースクとなります。一方、信仰しているのにもかかわらず、宗教上の命令や禁止事項に対し無気力で、十分な注意を払わないムスリムもまた、ファースクなのです。もう少し具体的にいうなら、「一杯ぐらい飲んでも別にどうもならないだろう」と飲酒について妥協してしまう人、「とても忙しくて、礼拝する時間がない」と礼拝を怠る人、「周囲を見れば、どれもこれもがあおっているようで我慢できない」と姦淫への弁解を考える人、これらの人はファースクであることから自らを救うことができません。掟に背き、必要な注意を払っていない、ということになるからです。

辞書からちょっと離れて、次のような解釈も可能でしょう。果物の皮からにじみ出てくる汁気、水分は、その果物が腐っているか、腐りかけているかであることを示すものです。同じように、命令や禁止事項に重きをおかず、ファスクとなっている人も、果物のように、腐りかけているのです。

ここでクルアーンの章句からいくつかを示してみます。「あなたがたは、アッラーを忘れた者のようであってはならない。かれは、かれら自身の魂を忘れさせたのである。これらの者はアッラーの掟に背く者たちである。」この章は非常に明快です。彼らはなぜファスク、掟に背く者たちとなったのでしょうか？アッラーを忘れたためです。なぜアッラーを忘れたのでしょうか？アッラーにふさわしい尊さ、重要性を見出さなかったからです。

別の章句では、次のように述べられています。「人びとの多くは本当にアッラーの掟に背く者である。」（食卓章第４９節）そう、これが現実なのです。十分な注意を払う人、そうでない人、どちらが多いでしょうか。雌牛章では次のように述べられています。「かれは、主の掟に背く者の外は、（誰も）迷わさない。」（雌牛章第２６節）なぜなら彼らは腐り、だめになってしまったからです。つまりアッラーは、腐ってしまったしもべの価値を取り払われるのです。ちょうど人間が、腐った果実を取り除くように。宗教上の決まり、広い意味で宗教は、人間が生きるうえで注意を払うべき、最重要課題です。ムスリムがファースクとならないための道は、ここにあります。ファースク、掟に背く者とならないことは、どれほど幸福なことでしょうか。